

第2回長野県生涯学習審議会 委員発言

日時：平成20年10月20日(月)13:30~16:00

場所：県庁議会棟3階 第1特別会議室

土井会長

まず3人の委員の皆様から、実践事例の発表をお願いします。

子どもを対象にして、地域づくりの立場から水野委員。

水野委員

教育と福祉については、聖域で、なかなか声を出しにくいような事情がある。

おかしいと思うこと。仕事が忙しい時に、福祉施設にショートステイで、父を預かっていただいたことがあった。家族が面会に行くと名簿に名前を書くが、1週間たっても、私たちの家族の名前だけが書かれている。「福祉って何」って、もう一度問いたくなる。1ページ、2ページと続いていくことを考えると、教育や福祉の聖域があるように、僕はとらえていたのに、なにか違うところへ行ってしまっているのではないか。

人間社会の中で人間教育ということ、人の狭間どうやって生きていくかを教えていない。そのことを、もっと大事にしなくてはいけないと思う。

また、学校では社会性よりも知識を教えるほうになっていないか。12、13メートルの腸の長さがもった農耕民族の日本に、アメリカの文化が入って、私たちより15パーセントも短い肉食の人たちの文化を取り入れた。わら文化から効率効果の文化のほうに。お年寄りも施設へ入れたらそのまんまということになるとしたら、日本人でなくなってしまっているのではないか。和と精神というものを、教えていくことが非常に大事なことだ。

また、公務員は育児休暇が3年間位取れるが、一般の会社ではそんな時間を取ることができずに、2、3カ月でお仕事に戻る。授乳の時間に、胸から子どもを離して行ってしまう。子どもはどういうことを思うか。仕事は一番、私は二番になるのか。母親も授乳をきっちり笑顔で与えていたいと思うが、社会がなかなかそういうことをさせてくれない。制度として、もっとゆったりと、子どもに愛だとか、思いやりだとかを感じさせるような時間を取れる社会がくればいい。

子どもが人格の形成をするまでに心の中の豊かさを教えていかないと、どうして私を産んでしまったと言われるような、そういう親にはなりたくないし、なってはいけない。愛と思いやりで満ちた社会をつくるためにも、もっと時間を割いていい。

昨日のテレビ番組。縄跳びをやった。成績が悪いのは一人の運動の苦手な子どもがいけないからで、その子を抜かそうとなった。その時ある女の子が、「それはおかしい、私たちのクラスはみんなですることによって価値がある」ということで、それで出て5位になった。みんなですることによって誇らしげに終わったという話。どうも結果だけを評価につなげ

ていく社会になってきてしまっている。人の思いやりや、まじめにやったことを認めてもらえない。なにか寂しい時代ではないか。

私どもの地域は、過疎地で、百数戸あったところが、今は十数戸の限界集落。ここを輝くところになりたいと、一生懸命いま苦慮しているが、やっぱりやれば、10年、20年、30年たてば、それだけの成果が上がってくる。私も20年間桜を植え続けた。3,110本植えた。やっと、西の吉野、東の陸郷と雑誌に書かれるようになってきた。郷土を思う心を大事にしなくてはいけない。

私はヨーロッパに友達がいる。デンマークの人間だが貴族のために社会主義国家が崩壊して、ハンガリーへ亡命した。話した中に、日本人の文化はあるかという話。たとえば学校が終わって社会に出るとき、なんて言って送りだすか。日本人だったら、「体には気をつけるよ。食べるものは食べるんだよ。人に騙されちゃいけないぞ。」というようなことを言って、社会に送りだす。ヨーロッパはどうなのか。「うちの家系に傷つけるようなことは絶対にするなよ。」「この集落の文化や伝統を傷つけるようなことは絶対にするなよ。」と言って送りだすそうだ。やっぱり文化の豊かなヨーロッパと日本の差が出てくるのかな。

日本人の特有の「和の精神」、みんなの心の中にあるように、地域の中に生かされている、社会の一奉仕者であるという感覚をもった子どもたちが生まれてくるといい。

土井会長

続いて、青年を対象にした実践をされている白戸委員。

白戸委員

10年も前になるが、松本の北部地域で、市街地に隣接し高齢化してきている地域をみんな考えようという講座を開始した。その中で話しているうちに、だいたい公民館に集まるのは高齢者だが、「年寄りばかりでいけねえ」と。「ぜひ、若者と交流しようじゃないか」ということで、若者と交流を始める。最初は美須ヶヶ丘高校にお願いして、放送部、生徒会と一緒に交流会やテーマを決めて討論会をやった。その中で高校だけでなく近くの丸の内中学校と旭町中学校の生徒会と一緒に、何か一緒にやれないかという話になった。

サイトウキネンを松本でやっている、ちょうどこのころで、サイトウキネンでは、自分たちがやっているのはお手伝いという感じで、どうもおもしろくない。自分たちもやってみたいと言って、調べてみたら、ザルツブルグで音楽祭があり、そこでは自分たちが参加してやっている。ああいうようなコンサートをやろうとなった。

基本的には中学生が実行委員長をやり、高校生と大学生が副実行委員長。要するに中学生を主役にして、高校生と大学生が支えて、それを大人が支援すると。公民館がその活動を行うという形。

今は、中学生がポスターを作っているが、当初は、大学生や高校生が作り高校の放送部が司会をし、中学校の生徒会が交通整理をするという形で、炎天下で手づくりのコンサ-

トをやった。パルコの広場の前でやったが、公民館の高齢者も来た。これはテントの中で見ている様子だが、「暑い中で、こんなうるさい音楽を聞かされ、えらいことだが、ここにいるのが私たちの仕事だ。」と。たぶん松本で初めて若者や子どもが主役になったもの。それまでは、動員をされたり、あるいはお手子にされたり、主役でなくて大人に使われてやる、あるいは大人が用意したイベントに参加するという形だったのが、自分たちが用意して、自分たちで実際にやるという、そういう経験をした。この中には小学校から中学校、高校、大学と、全部でだいたい毎回 13、14 団体、人数にして 500 人から 800 人くらいの出演者がある。親が見に来るし、パルコの広場の花時計公園でやるので、2~3,000 人は毎回集めるようなコンサートになる。かかるお金は数万円程度で、みんな手づくりでやっている。公民館の童謡唱歌を歌う会なども参加して、そういう意味では異世代の交流の形になっている。

どうしてこんな事例を見せたかという、前回は青年たち、若い世代、女性だったら子どもが生まれるまで、男性だったら、もうちょっと下手をすれば定年まで、地域とのかかわりが少なくなっている。なぜなのかについて話をさせていただく。これは、私ども大学で取り組むときの基本的な考え方である。

生涯学習というと、個人のレベルの話のように聞こえるが、もともと、戦後の公民館などで行われてきた学習というのは、一人ひとりの問題を持ち寄って、それをみんなの問題に共有化していくプロセス。そのプロセスの中で、一緒に歌を歌ったり、ハイキングに出かけたり、講座をやったり、話を聞いたりということなのだが、本来の目的はむしろそれをやることではなくて、それを通じて、地域の課題をみんなでも共有化していこうということにあったのではないか。

どうしてそれが必要だったか。たとえばサークル活動だと、好きな人同士が集まればいいが、地域という枠組みの中では、どう考えても地域には自分とは全然考えの違う異質な人がいる。要するに自分とは違う人と一緒に生きていかなければいけないのが、たぶん地域だ。ところが、それをただ放っておくと喧嘩になるから、きちんと調整をして、みんなでも仲よく生きていけるような仕組みが必要になるわけで、それを住民自治と呼んでいるのではないかと私は考えている。

ところが、過去 60 年の間に、一つは、経済が発達し、問題をお金で解決できる。隣の人と仲が悪くても生きていけた。自治会に入らないで、ごみを捨てようと思えば、金を払えば捨てにいった。もう一つは、行政機能の充実。雪かきなど、隣近所と一緒にやらなければいけないことを行政がやってくれるようになった。そういうことで、地域の役割も低下したし、地域の中の学習もなくなってきたのだろう。

その中で、教育はどうなったか。どちらかというと自分自身を高めていく。たとえば、社会教育でも、公民館でも、どちらかというと地域のことを考えようというより、自分が教養を高める。自分の能力を高めることで、走ってきたのではないか。

ところが、いま逆に高齢化だとか、経済と行政という二つの歯車がきしみ始めている時

代に、この学習というのが見直されてきているのだろう。

日々大学で若者と接し、今まで教育がどういうことをしてきたのかと考えたときに、たとえば点数だとか、あるいは偏差値だとかって、序列化されている。そして、知識を習得していくのが、学校の教育である。では、子どもたち、若者はというと、どちらかというと自己実現を一番中心において、教育というのは、私のものなのだというような私事化というのが進んできた。その中で学校は、どちらかというと閉ざされ、自己完結的になり、学びそのものも生徒と教師という関係性の中でやってきたのではないか。

結局、水野委員の話もあったが、地域の子どもではなくて、うちの子ども、学校の生徒になる。そして、うちの子と生徒という役割のみになり、地域の子ども、みんなの子どもというものが、どうも薄れてきた。その結果、地域の中で当然子どもや若者の役割というのが失われていく。その辺を、変えていこうというのが、今この審議会では先ほどから出ており、答申中でも問われているのかと思う。

そういった意味で、教育のあり方の流れとして、その辺を考えて地域に学校を開くとか体験をするとか、あるいは「生きる力」とか言って、ちょっと変わってきた。

少し焦点を絞って、では若者はどうか。特に中学生くらいから20代の、30代くらいまではどうか。まず地域とふれあう機会が極端に乏しい。乏しいだけでなく、地域とかかわる動機がない。地域となぜかかわらなければいけないか。あるいは、地域とかかわらなければいけないと思っても、どうかわっていいのかわからない。地域とかかわる術を、小学校の育成会くらいまでは地域とかかわってきているけど、それ以降のかかわりがないから持ちえない。

ただ、うちの学生の特殊性もあるが、学生にこのへんの地域はどうかと話を聞くと、我々が思っているよりも、学生は地域には否定的ではない。僕ぐらいの年代だと、しがらみとか若者が押さえ付けられるようなイメージがあって、なんとなく嫌なのだが、いまの若者はそういう距離感さえないくらい地域のことを知らない気がしている。

若者にとって地域は要らないかという、実は要る。なぜかという、いま若者がかかえる課題というのが、たとえば人間関係を構築できないことである。これは当たり前で、家と学校にしかいなかったら、知らない人と会っていないわけだから、知らない人とどうやってしゃべっていいかわからない。あるいは社会性、協調性に欠けるというのも、付きあう人が少ないということに尽きると思う。生活体験が乏しいも、これもしかり。

そういう意味では、地域や社会の中に自らの存在感や役割を見出させない。これがまさに、一番若者にとってのいまの課題だし、これはたぶん地域というものが、目の前になかったことによって、生まれてきていると思う。

逆に、地域にとって、若者はどうか。大人は、損得でものを考える。たとえば、合併問題があったとき、大人はとにかく、賛成でも反対でも、損か得かの議論。ところが、辰野高校の文化祭での辰高フォーラムで、合併についての討論会をやったときに、高校生がこういう町をつくりたいから合併をしたいんだとか、したくないって話をした。損か得

ではなくて、善か悪か。正しいか正しくないかでものを考える部分が、やはり若者にはある。その特性が、地域にとってはこれから必要になるというのが一つ。

それから、人間は自分が死んでしまった後のことは、なかなか考えられないもの。目の前に、自分の次の時代を受け継ぐ子が、若者がいるかいないかいうことは大きい。要するに、実感として若者がいるだけで元気になってくるという部分がある。

三つ目。地域も、特に高齢者はそうだが、目標がない。若い子を、子どもを育てるということが、実は大きな目標のひとつ、あるいは地域づくりの柱になるのではないか。そのような意味合いで、若者も地域にとって必要なものだし、若者にとっても地域を必要としているということではないか。

ただ、実際にいろいろなことをやっていく時に、いろいろ問題がある。公民館担当もそうだが、大学の立場から言うと、「よい学生を求めないでほしい。」要するに、いい学生だったらいいが、手間のかかる学生は要らないと。何とかしてくれと。何とかしてくれ、でなくて、一緒に育ててほしい。一緒に育てるという意識がなければ、若者は、未熟なものだから、たぶん若者は地域ではなかなか活動できない。

それから、「正しい理解」。いまの若者は暇ではない、アルバイトで忙しい。1カ月先の予定を入れるとしたら1カ月先にしないと、アルバイトだって変えられない。お金も持っているから、ちょっと飯を食わせるぐらいでは、全然なびかない。それに、ただの労働力ではないこと。役割を考えていなければいけない。それから、若者に何でもかんでもお願い、という部分が、地域にあるが、地域が若者に依存せず、自立をするということも必要。

子どもが一番いま重要だと思っているのは、若者が地元で定着をしていかないこと。大ざっぱな数字でいうと、たとえば日本の私立大学の中で、だいたい大都市にある5パーセントの大きな大学が、40数パーセントの学生、要するに半分近くを集めている。残りの地方にある95パーセントの大学が、私立大学に進学する学生の半分を取り合っている現状。長野県でも、多くの大学・短大が、定員割れになっている。これは、一時的なものではなくて、そういう流れになってきているということ。少子化の中で、長野は特に少子化の速度が遅いから、都会の大きな大学も、長野プロジェクトというのが各大学にできていて、重点的に長野県から人を東京に連れて行くということをやっている。

たぶん将来的に、その子たちが、帰ってくるかという帰ってこない。帰ってこないし、帰ってこられない。そのときに、地域がどんどん縮んでいくではないか。ただ、若者たちも、僕の実感だと地域がいやで東京ですっと生きたいわけでないけれど、ここに残る意義が見出せないというのが、正確なところ。

二番目に、やはり閉塞感を抱えているのは事実。若者に聞くと、特に、高校はどこって聞かれるのが一番いやだと言う。そういう部分が、若者にとって外に行きたいというようなものになっているのかなと思う。

三番目に、とにかく自分を高めて、1点でも多く取って、人より上にいって高い給料をもらいたいといったら、どうしても東京に行くのが一番、大阪に行くのが一番。だから、そ

のところも考え直さなければいけない。

それから四番目が、これが結構大きい。大学は、全入の時代になりどこの大学でも入ることができる。ところが、親や先生は、どうせ行くのだったら東京の大きな大学へ行けと考える。子どもたちが、ここに行きたいと言っても、あるいは専門学校へ行ってこういう勉強、と言っても、いやおまえは東京の大学に、この成績だったら行けるから行けというような、そういう価値観が多少ある。自分で自分の首を絞めているような気がするが。

大学の側も、あるいは高等教育機関の側も、責任があって、東京の大学と同じようになろうとしてこなかったらどうか。要するに、競争して東京と同じようになろうという部分だが、逆にいうと独自性を失わせて、魅力を失わせてきたのかと思う。

私どもは地域で育てて地域に帰すということで、9割近くが県内出身者で、ほぼ100パーセント近くが県内に就職をしていく。そういう意味からいくと、いまの若者たちの中に、働きかけをすれば地元に残り、地元で活躍しようという意志はあるのだろう。それを、もうちょっと地域全体でやらないとだめだろう。先ほど言ったような大きな流れの中では、たぶん下手をすると地方の大学はなくなっていく可能性が高いのではないかと思う。そういうことを、大学とかだけでなく、地域全体で考えていかなければいけない。

そういう意味で、私ども微力だが、いろいろやっている。特に地域とのつながりについては、教育を通じて付き合うことにしている。学校開放とかをやるが、教職員は結局本気にならない。何に本気になるか。教育の分野で地域と付き合わない限り、地域と本気で付き合おうと思わないというのが、実感。したがって、うちは教育を通じて地域と付き合えるということで、カリキュラムの中に地域と接点を持つようなものを入れていて、具体的に、「ゆめ」という地域連携センターをつくって、専任のコーディネーターを配置している。教務課の下に置いて、授業科目のコーディネート機関として位置づけている。あるいは、いろんな社会活動とか、そういう授業もある。地域に出られるような、単位化された授業も置いている。

最後に、もうひとつ大事なのは、大学と地域が双方向ということ。こういうような大学が教育を展開するとき、それが大学生を育てるという側面と、地域の担い手をきちっとつくる、あるいはその活動そのものが地域づくりになっているという、地域づくりと両方の側面。あるいは、地域の側からすると、地域づくりだが、それが若い人を育てているんだという、そういう双方向の関係をつくっていく。高等教育機関と、あるいは中学校、高校とでもそうだが、ウィンウィンというか、お互いに協力、連携するような形で、お互いの中に本気で位置づけていかないと、なかなか地域と大学や学校が一緒にはできないのではないか。流れている時間や、目的とするものが全然違うので、踏み込みが必要。

土井会長

続いて、中高年を対象にした公民館での実践について神津委員。

神津委員

現在、団塊の世代が地域に戻り始めている。今後この年代が、社会的な役割が大変大きくなる中で、地域とどのようにかかわっていくのか、大きな課題の一つ。

事例の一点目。定年退職された後に、世代間交流を積極的に行っています学習サークル「ともがき」について紹介する。

まず、取り組みの経緯は、社会福祉施設、特別養護老人ホームを定年退職された女性が、「お年寄りの方と一緒に楽しく遊べる交流の場をつくりたい」と、仲間たちと居宅老人など交流する、民間ボランティアとして活動を開始して、現在は 9 年目で、公民館の学習グループとして活動している。

現在の会員数は 30 名ほど。公民館を活動拠点として、幼稚園、保育園、児童館、小中学校、それから老人施設等へ出向きまして、さまざまな方と世代間交流をしている。具体的な内容は、お手玉、あや取り、しめ縄づくり、布ぞうり作りなど地域の文化伝承を行っている。さらには、地元の区長、PTA、老人会にも働きかけ世代間交流をやっている。

その中で、中学校男子生徒が面白がって作ったとか、またお年寄りも、昔の遊びをするとうちの子どもの頃を思い出すというようなことで、大変喜んでいる。

さらに、家でテレビやゲーム中心の子どもたちも、昔ながらの遊びに接すると、目の色を変えて夢中になる。そんな姿を見ると、本当にうれしいですねと、佐藤会長の気持ちが出ている。地味な活動だが、地域に貢献している。

なお、この退職されている方々に、どんなことを注意してやっているのか聞いたところ、(1) 昔の肩書を捨てていきましょう。みんなが同じ目線でやっていく。(2) 講師はいりません。会員みんなが先生、または生徒になる。(3) 出る釘は打ちません。自分の好きなこと、お互いに知恵を出し合ってやる。(4) 無理強いはしません。みんなが自由にやっていく。(5) あいさつをしましょう。頭を下げていきましょう。(6) 自分の中に節度を持ちましょう。良いこと、悪いこと、お互いに年代を超えて、いつも勉強していく。(7) それぞれ退職された皆さんなので、年金、それぞれ生活があるので、必要以上のお金はかけません。できるだけ家庭にあるものを再利用して、それを地域に教えていきましょう。七つの基本方針を柱にして、会員それぞれが人格を尊重し合って活動している。

さらに、同じ内容を繰り返して教えているので、仲間の中で新しいことを勉強しなければだめだ、この先困るのではないかということで、常に勉強していく必要性を感じて、県の生涯学習推進センターで研修や各種学習会に参加して、自己研鑽を積極的に行っている。

この活動をやって、どんなことがよかったのか、またはこれらの課題はどうか聞いた。その中で、子どもたちに忘れられている昔の遊びを通じて、文化伝承ができています。さらには、核家族化が進んでいるが、世代間交流ができることはお互いに家族、または人間関係、安らぎと信頼関係が生まれる。このスライドも 3 世代交流で、子ども、お父さん、おじいさん、おばあさんの中で、幅広くやっている。子どもがそれぞれ発表、自分の意志を通じさせているスライド。それから、会員自身が生き生きとなり、多くの人と顔見知りにな

なれたこと、なれることのすばらしさを感じている。

課題は、退職された方々が活動して9年経ち、後継者、仲間づくりをさらにどうするか。新規会員の募集にそれぞれ知恵を出し合っている。

退職後自分の経験と能力を仲間とともに地域に生かして、さらには会員自身も生きがいをもって勉強、生涯現役の生き方をしている。

次に二点目の事例。定年退職後の男性を対象にした、「佐久のおやじの会」を紹介する。佐久市に臼田公民館があり、利用者の約7割が女性で、年配の方も積極的な交流、ボランティア活動をしているのが、公民館の現状。

それに比べ男性の方は、なかなか交流の場に出ない、出たがらないとか、または地域になかなかなじめないのが現状。そのような中、定年退職後、何かを始めてみたい、やってみみたいとか思っている男性の方に、何とか外へ出て、生きがい探しやセカンドライフを仲間と一緒に楽しむきっかけになればと、公民館が地域の男性に呼びかけ、「佐久おやじの会」が発足。

活動にあたり、押しつけの活動ではなくて、自分でやりたいことを主体的に考え、自主的に取り組む内容で、例会は月一回、時間は午後3時からと、遅めに設定した。時には、会の終了後に外に飲みに行ける時間帯を設定したのが特徴で、集まりやすい。

今年7月から始め、3月まで10回のコースで計画され、現在5回終了。初回は、自己紹介を兼ね自由にディスカッションした。その時の写真だが、地元のおそばの粉を使って、そのおそばを食べながら初会合の様子。

会員は、田舎暮らしにあこがれて、定年退職後佐久に移り住んだ人、早く奥様が亡くなって必要に迫られ料理教室に通っている人、過酷な闘病生活を経験された人など、それぞれ違った人生を送った人たちが、自由に発言して、すてきな仲間になりましょうという雰囲気です。その後、とりわけ健康問題に関心があって、「健康が何より」と題して、体験談の発表や野外へ出て佐久の自然を満喫した。歩きながら森林浴をしたり、今晩の水割り用にわき水を汲んだり、まずは集まって活動しましょうと。

会の特徴は会長・代表者を置かないで、全員で協力して行うよう話し合いをされた。それぞれの立場で体験を生かし、情報の共有化を図っている。それぞれの立場、人格を尊重した中で運営していく。

この会は初めての試みで、人が集まるのかと心配されたが、6名で発足し、現在は10名になったところ。今後も、自然に会員が増えればよい。

なお、このおやじの会の成果と今後の課題は、この会はそれぞれの人格を尊重して主体性を持つ中で会の運営をしていくというのが特徴で、それぞれが自分たちで何かしようとする考え、これが行動につながっていくのではないかと期待している。さらにこのような会を他の地域の公民館にも進めていきたい。

二つの事例を説明したが、定年退職後、今までの経験を生かして再就職・ボランティア活動とよく言われるが、現実はそのようなものではない。さらには、一般的には男性

の多くの定年退職者は、すぐには地域に溶け込めない、何をしたらよいのか分からないという方も、相当数いるのではないか。

人の生き方、人それぞれで、公民館でそこまでやる必要があるのかという考えもあるが、団塊の世代の経験を、若い人につなげていけるような活動を行い、社会の変化に対応していきたい。

さらに、それぞれのサークルの中でやっている、学んだ知識を自分の中に置くだけでなく、社会の中に生かしていくような、新しい社会の構築ができればいいのではないか。現実には厳しいと思うが、公民館としては、まず何かを始めるきっかけづくりを行い、一人でも多く何かの活動に参加して、新たな生涯学習ができるように、地味だが一步一步進めていきたいと考えている。

土井会長

アンケートにお答えいただいたものが、資料3、資料4にある。これらも念頭に置きながら、今日の議論は二つのことが課題であり、ひとつは人や地域とかかわって学ぶ機会や場、現状がどうなっている、どういうふうにしていけばいいかということがひとつ。もうひとつは、ここに学んだ成果を人や地域に生かす活動の現況がどうなっていて、どういうふう

に打開策を見つけていくか、が本日の課題である。

小泉委員

労働者としての視点から、実際どうなのだろうと考えてみたが、どんな状況があったらいいのか、みえてこない。こうできればいいと、いろいろ頭の中で想像できるが、実際にどうか、いろいろ考えてみた。現役世代も大事なことだが、いわゆる定年退職した後、どうやって地域にかかわっていくことができるかを原点に考えたい。地区労福協というものがあるが、地域を中心にして現役・退職者等に横の広がり新たな繋がりを提供することを活動の一つとしている労働福祉団体。実際、退職された方が、どうやって入っていくか、何を目的に入ってくるか見えてくるのか、ということが課題。

現在、現役世代は仕事に対する負担が大きく長時間労働等で、どんどん地域社会から遠のいている感がある。やがて退職を迎えようとする世代は地域への関わりの必要性について、頭では理解している。自分は何をやっていくのだ、どういうふう

に生かしていくか、あるいは、かかわるのかというようなことを考えたくても、関わりをもっていないので考えにくいのが実情。団塊の世代、定年退職者に実際にかかわっている者として、ここで論議されたことに学び生かせればと考える。

神津委員

私も定年退職して2年目。去年、1年、フリー。仕事、あと趣味もなく何もなくてやっていたので、辞めたあと、何をしようか迷って1年を過ぎた。幸い農地があったので、農

業をしながら自分の家の野菜を作って 1 年のんびりと過ごした。現実には、相当悩んでいる方も地域にいる。

そこで、甘い考え方かと思うが、できたら退職者関係のそういう機会があれば、定年する 1 年や 2 年前に、できれば数年前に、そういう福社会なり、企業なりが、定年後の人生について少し知恵を与えるような福利厚生のある事業があるかと思う。福利厚生の中で、何か押しつけたりしないが、定年退職したら、はっきり定年はわかっているだから、ズバリ企業なりも言わないと、勤めている方はしないので、何年後には定年です、定年後にはお互いに自分の人生を考えていきましょうという形の中で、企業内で福利厚生の中で、何か事業を盛り込んで、お金も少し出してもらい、学校の講習や公民館活動に参加してもらって、企業内、経営の中の人間を育てる中で、予算化するなりしてもらえばありがたいという、ひとつだけの案で、具体的な答えはない。

坂本委員

子どもたちが社会人として勤労観を学ぶために、団塊の世代を頼りにしている。

企業経営者から「子どもたちをきちんと教育してから社会に出してもらわないと使いものにならなくて困る」と言われるくらい、今の子どもたちは働くことを学んできていない。中学校では、キャリア教育ということで、三日～五日間とか、企業に赴き職場体験を進めているが受け入れ事業所の開拓や確保、時間調整等で、教職員への負担が課題となっている学校もあると聞いている。団塊の世代の方が、社会人・職業人としての経験を生かして、キャリア教育の担い手になれば、学校も助かるし、子どもたちも経験者の生の声を聞くことができる。そういうかたちでかかわっていただけたらありがたい。

振り込め詐欺など、若者がお年寄りをだますという嘆かわしい事態が起きている。これは核家族化・少子化等が問題になって起きている事件ではないか。小さい頃から高齢者や団塊の世代など、様々な世代の方々と接することによって、弱者をだますような犯罪を防ぐ一つの手だてとなるのではないか。

P T Aの中でも「親になれない親」が問題になっている。親による子どもの虐待や無責任無関心が委員会などで問題にされている。少年・青年の頃から乳児や幼児に接することを学んでおけば、子どもはただかわいいだけでなく、おしめが汚れれば替えなければならないし、おなかがすけば泣くし、親は大変だという心構えができる。乳幼児を連れた子育て世代との交流があれば、親になってから慌てて、虐待をしたり、パニックになったり、殺してしまったりする、そういう命にかかわる事件が少なくなるのではないか。

塚田委員

企業内での生涯学習の取組として企業で退職後のことを見越して教育をやっている事例が少ないようだ。これからの課題だと思う。

企業で子どもたちを受け入れて職場体験をやっている。受け入れ企業が少ない。受け入れても子どもたちにどうやって教えたらいいか、現場の作業を手伝わせるということくらいになってしまう。果たしてそれで学校を卒業して働くということが本当にわかるのかという不安がある。教えるということでは素人だから、うまくできているかどうか不安がある。

松本大学の「地域の子どもたちを育てて、地域にかえす」ということだが、地域としての受け皿になるというのが企業の当然の立場である。地域の企業で学生が働いてみたいという気持ちを起こさせるのが我々の一つの使命。

松村委員

人や地域とかかかわって学ぶ機会ということと、そして学んだ成果を生かすということの中に、青少年教育施設が現在行っていることや、やらなければいけないことだと思えることがある。小学校学習指導要領解説「特別活動編」の中でも、児童の発達の段階や人間関係の希薄化や自然体験の減少といった児童を取り巻く状況の変化を考えると、小学校段階においては、自然の中で集団宿泊活動を重点的に推進することが望まれる、とある。また、一定期間（例えば一週間程度）わたって行う事が望まれる、と明記されている。

兵庫県は、10年以上にわたって、5泊6日の子どもたちの体験学習を全県下で実施している。京都市教育委員会は、平成20年から3年間計画で、京都市の全学校に5泊6日の宿泊学習を行うということを打ち出している。

長野県は全国でも授業日数が多いが、統一した泊数でなく、各学校まちまちな泊数である。子どもたちの体験の場の確保ということであれば、泊数を明確にできることが望ましい。それに伴って、学校の先生だけの負担になってしまっはいけない。特に長野県の中では先生方への配慮として「2泊3日」という勤務の関係の問題があるようだが、子ども施設をはじめ国でも、小学校の長期自然体験活動指導者養成研修を行っている。ただ、なかなか広報がうまくいかず、集まりも悪い状況だが、ぜひ研修の学びを生かすということで、うまくリンクし、スパイラルのようになっていけば、子どもたちのためにもなり、自分の学んだ成果を生かす場になる。

二つ目として、公民館の活動を見て、参考資料の4ページにもあったように、自分の趣味や健康、生きがいなどに役立っているというのは、そうだろうなと感じていた。市町村が生涯学習の振興計画を立てていく時に、何を進めていくかと考える。それは病気になるより元気で、生き生き働く大人の人たちが多いほうがいい訳で、それを計画の中に盛り込むこともあると思うが、その次のステップとして、自分の次に、「地域のために、子どもたちのために、他の人のために」という体制づくりがうまくできればいい。公民館の活動で、最初は自分の生きがいのためだったのが、今度は、子どもたちの活動の講師になっていくという形が理想である。ただどうやったらうまく体制づくりができるのかわからないが、公民館の活動でも、はじめの一步という話があったが、さらに次は、青少年教育施設に來

て、子どもたちのために講師をする、となっていく事が理想である。岡山で子どもの居場所づくりの事業を3年間実施した。地域の公民館で学んだ方たちが次の年度には青少年教育施設に来て、毎週土曜日、居場所づくりの講師になるというようなことを少しずつ構築してきた。そのような形の、学んだことを生かす場も見据えた体制づくりができていくといい。

塚田委員

小泉委員の話にも係わって、我々も企業として各学校へ出前講座ということで、社会について、働くとはどういうことなのかと、私も何回も行ったことがあるが、現役が行って話すのも必要だが、やっぱりピシッと定年を迎えられた方の話というの、非常に大切で、子どもたちに聞いてもらいたい話だ。そういった方々が講師になって、ボランティアで子どもたちに話をする。とてもいいことだと思うので、ぜひそんな機会をこれからもつくっていききたい。

神津委員

公民館も、学んだことを生かすことはやらなければいけないことで、一生懸命やっているが、ただ、すべてが生かすまでいかないの、一つの事例を。

始めて2年目になるが、小学生との交流の事例がある。公民館の学習グループの中に、短歌や俳句、川柳をやる方がいて、ひとつの会をつくって文化祭で発表している。

これについて、小学校に投げかけたところ、学校でも積極的になり、二つの小学校からぜひやってくださいと依頼された。なぜやるのかと聞くと、授業の中に俳句があり、学習しているおじいさん、おばあさん、お母さんに来て教えてもらいたいということで始めた。

学校の先生も協力的で、3年生や6年生を対象に俳句を学べた。学校の先生も教えてあるが、学習グループの学生、お年寄りの方も、社会的にはこうだよと教えて、相当効果があった。また、ただやっているだけではおもしろくない、みんなに知ってもらおうピーアールも大事ではないかということで、広報で流すとか、やった結果をそれぞれのケーブルテレビ、報道機関に放映してもらおう。そのように知ってもらおうことも重要。まだ不十分な組織だが、逐次そういう形で進んでいくのではないかと。

土井会長

公民館から呼びかけられて、学校教育と連携された。先ほど坂本委員から、団塊の世代の退職された方のキャリアを学校で生かしてもらえないかとあったが、ではどうやってそういう方々とつながりをつればいいのかということが問題になるが、このことについて提案はないか。

白戸委員

私どもの大学に、地域の知恵者とか経験豊かな人たちに大学教育にかかわっていただくという趣旨の教育サポーター制度がある。50、60人の協力をいただいている。

いま学生たちには夢をもてないような情報が多く、大学の教員がいくら理屈をいってもピンとこない。しかも働くということでも、家では愚痴を聞かされて、あまり夢をもてるような家庭環境にない。僕も含めて、家に帰ればそう。その中で、面と向かって自分の働いてきたことの楽しさだとかをストレートにぶつけていただいたときに、若者は「捨てたもんじゃない」と思う部分があって、すごく価値がある。

ただ問題は、どこに誰がいて、たとえば経歴はもっているが学生に教えるのに向いているか、かなりきちっとした調整、コーディネートが必要。ただ連れてきて、話をすればいいというものではない。うちの場合には、地域のほうの受け手が公民館で、公民館にこういう人がいないかということ、公民館がいろいろ学生を見た上で送ってきてくれる。そういう調整機能、地域の公民館だとか社会福祉協議会だとか、学校にもそういうことを調整するところがあって、きちっと話ができるような仕組みができればいい。

土井会長

公民館では地域の人材をプールしておいて、ニーズに応じてお世話するという考え方が。

神津委員

佐久の場合データ登録の人員が100何人かいる。60の分野で、登録制度がある。市民からこういうことを勉強したいという話があれば、その方を紹介すると、好きなこと、自分が教えてもらいたいことができる。いま先生がおっしゃるように、ぜひそういう形があれば、うちも高齢者大学で60代にしても相当いるので、今年から老人大学を卒業した方で、まだ特殊なものをやりたいと中で、大学院という名称で募集したところ、集まった。専門的に地域の歴史を一回やる、経済のサブプライム問題と、現在にあったことを飛び込みでやっている。教えてもらえば、うちでもそういう方に勉強してもらえばありがたい。

土井会長

なんという名前の大学院か。

神津委員

佐久市高齢者大学で220人入っていて、佐久市高齢者大学大学院という名称で、あまり多いとまた勉強しづらいので、25名定員で募集して、26名でいま運営している。まだ始めたばかりで、結果が出ていないが、ある程度特徴をもっていきたい。

土井会長

生涯学習というと、学校教育も大事な基本をつくる時だが、先ほど松村委員から宿泊

体験の重要性も指摘があった。長野県は授業日数が多いが、割合 2泊3日が多い。小学校で通学合宿あり、青木村でも私どもの学生が1週間通学合宿。小学生は2泊3日ぐらいが限度かと、先生方もたいへんでできないかと思っていたが、やっぱりそれを越えた1週間になると、ものすごくまた学びが深くなる。このことについて、松村委員から長期の宿泊体験の重要性。また水野委員から子どもの宿泊体験に対する助言等お願いしたい。

松村委員

私どもの施設は、長期の事業をするが、2泊3日を過ぎた後には、さまざまな小さなけんかも起きるが、子どもたち同士のコミュニケーションは、反対に取れるようになってくる。健康状態も2泊3日ぐらいが、一番疲れる。最大の疲れの時に帰っていくことになる。3日目にはけがをする率も多くなる。2泊3日では、自分をさらけ出すことをせず、我慢して、我慢して帰るという子も、中にはいる。でも、3日を過ぎるともう我慢はできなくなって、子ども同士の葛藤も沢山おきる。9泊10日の事業をしているが、その山を一山越えた状態というのは、ボランティアの学生が何もしなくても、どんどん自分たちで考え、自分たちで行動していく。それには、ある程度の長さが必要。

先生方は短い泊数でもかなり詰め込むことが多い。長くなるとゆとりをもてるし、先生方も自分で楽しいと思えることを組める。2泊3日ぐらいだと、すべてこれも、あれもとプログラムを組んでしまう。

先週まで、N小学校の4年生が4泊5日の宿泊体験を実施した。最初先生はプログラムをいっぱい入れていた。先生は打ち合わせの中で、「子どもたちが自由にしたり、教師から指示をしないという状態が怖い。でも、子ども達が自由に過ごす様子を見る時間というのは、やっぱり教師にとっても大切だろう。」と言っていた。保護者にとっても、宿泊体験を終えて家に戻ったとき、子どもに対する考え方が変わり、子どもたちも長期の宿泊体験を実施することによって、親のありがたみ、兄弟のありがたみということも、感じるということが作文等の中に出ている。

信州大学の平野先生の研究にあったが、自然豊かな地方の子も、大都市の子も、自然体験活動をする率というのはほとんど同じである。ゲームをするのもほとんど同じ。特に地方では、車で送り迎えをしてもらう子が多い。歩かなくなっている率は、地方の子が多いのかもしれない。

学校の中だけでなく、生涯学習の中でも自然体験活動の量を増やす取り組みがもっとできたらという願いも込めて思っている。

土井会長

学校教育が自然の家や公民館等の社会教育施設と連携していく、こういうことも開かれた学校づくりになる。長期の宿泊を通して、親への感謝の念も出てくるとあった。水野委員から話で、日本では郷土を愛する心がない、日本の文化ってなんだということだが、親

への感謝、親孝行の気持ち、そして地域を大事にする気持ち、人間を愛する気持ち。人間には三つのふるさどがあると。ひとつはお母さん、二つ目は故郷、三つ目は国だと。親への感謝。お母さんってたいへんだな、お父さんってたいへんだな、働いているってたいへんだな、ということを知って、それに感謝する気持ち。身近な地域を愛する、郷土愛ということが大事で、小さい時や小中学校時代にこういう体験をさせるのが大事。

水野委員

彼が言った話の続き。日本人の文化を知っている。それは、捨てること。日本人は、親も捨てるし、郷土も捨てる。家を造れば、あたかもやってやったぞという顔。ヨーロッパでおじいちゃん、おばあちゃんが努力して造って、お父さんが磨きをかけてきた家を捨ててしまったら、その人は人格を疑われると。それなのに、日本人は親も子も捨てるし、金属バットが出るのは当たり前だと言っている。

不思議で困ることがある。6歳の子どもを40分間こうやって座らせておくことは正常か。そうできる子どもが、いい子どもか。もし、馬の子や、羊の子や、ヤギの子や、ほかのすべての子だったら、そんな強制することがないと思う。先生のところで時間を費やしていく、子どもはいい子ども。それは教育というカリキュラムの中へ組み込んで、やっていくから、都合のいい子ども、いい子どもでは都合のいい子どもだと思えてならない。

お父さんやお母さんと一緒に、おじいちゃんやおばあちゃんのところへ行って草を取ったり、稲刈りを手伝ったりして、その中で「おまえと取った稲は、こんなにおいしかったよ」というようなことを言って認めてあげることが、子どもを伸ばすこと。

私どもで農場を少しやっているが、子どもにハウスの中のラベンダーの草を取ってと言ったら、ラベンダーの中の草をみんな取る。隣に他のものが植えてあって草が生えていても、草は取らない。いつも与えられることに慣れてしまって、自分が考えることがあまりない。だから、企業へ行っても、半年や1年は全然使いものにならないというのがある。先輩についてやって、やっと理解をしていくということになる。

それから、昔の教育者だったら教育者のために死ぬこともできた。魂を吹きこんだ教育ができる教育者が、いまいるのか。登校拒否の子どもが僕のところへ来てぶん殴ると、それだけで変わってしまう。教育の現場では暴力だとかは絶対だめなことになっているが、その子どもが本当に立ち直るのなら、それも大事なことなのかな。獅子が崖から子どもを落とすというか。昔は学校の先生に言うぞと言われれば、おっかないといって悪いことをやめたものだが、今学校の先生に言うぞと言ったら、お母さんの方がよっぽどおっかないみたいになってしまった。師として慕うことができない状況。

家庭も、またマスコミもいけない。いい子も、悪い子もわからないで、朝起きてから、ブッシュが悪いとか、小沢が悪いぞ、何が悪い、そこだけずっと情報として入ってくる。いいことで、褒めてもらった話は、耳に入ってこない。おかしい話で、人を悪くするための情報が流れていて、その中に置くのだからよくなるわけがない。中学生の女の子が無免

許運転で人を轢いたまま、300メートルも引き摺ったとか、いやなことばかり毎日耳にする。認めてあげられるような教育があってもいい。うちの子どもは、先生に、おまえは鉄棒うまいと言われ、うちに鉄棒を作ってくれというわけで鉄棒を作った。絵かきの人でも先生が認めてくれたことによって、絵の道に入ってすごい才能を発揮することがある。

教育者をやって定年になって何やっていいか考えている暇はない。ぜひ登校拒否の子どものところへ行って、マンツーマンでも教育をしてもらいたい。僕は早く現場から逃れて、自分が好きなことをいっぱいやってみたい。

土井会長

いま不登校のことが出た。全国的には13万人とも言われている、本県にも2700人近い人が行っていない。それから、その後のニートと言われる、企業にも勤めない、学校にも行かない人たちが、全国的にはある数字では50数万人とも言われている。こういう、青少年の問題が、ひとつ生涯学習という点で欠かせない点だ。

臼田委員

4人の委員の話のように、私たちの専門学校で最近増えている子は、机に座っていることはできる、おとなしくしていることもできる、ただその子がいったい何を考えているのか、何がしたいのか、こちらが問いかけても答えが返ってこない、自分の意思表示ができない子がものすごく多くなっているように感じる。

特に専門学校に通ってくる子たちが、最近、経済的な問題で、遠くに出せないとか、大学まではちょっと厳しいとか、そういう感じがする。もう外に出ないで、地元就職しようという子たちが多く専門学校に入ってきて、そこから地域の社会を担っていくものとして巣立っていく形が多くなってきた。

地域に残る子たちを見ていると、おとなしい子たちが多い。学校で元気に自分のやりたいことをやって、みんなの前に立って発表や活動ができる子たちに埋もれて、みんなに引っ張っていかれる中で、ずっと過ごしてきたという子たちが多い。

その子たちに自主性をもたせて、そして社会人の一員として、もしくは企業を後々引っ張っていく人材として、どのように育成していったらいいのかということを考えたときに、まだ目的をはっきりもっていない、おとなしい子たちに対して、何をさせてもらったら一番いいのか。専門学校は少し特殊な教育機関だが、最終的に社会人として即戦力となる人材を育成していこうというところにある。たとえば私たちはビジネス系の授業が多いが、簿記などがしっかりできて、業務的には滞りのない状態までさせていただくと。

ただ、実際的な問題として積み上げてきているものが少ない子たちが多く、自分のいいところもわからない子たちが多くて、自分の長所短所を書きなさいと言うと、短所はもう十何個も書けるのだが、長所を一つも二つも書けない子たちが多い。この自信のなさ、積極性のなさをいかにしたら打開できるだろうと考えたときに、もう一回、小学生と同じ

ように自分のできることを探そうということで、今年は高遠青少年自然の家に行って、たった2泊3日ではあるが、体験学習で、いろんな自然にふれあう中で、また普段学校以外のところの友達とのかかわりを、少し見つけてもらおうとした。おとなしい子たちが多いので、積極的に前に出ていく子も少ないが、その中でも自分たちでまとまって、班長をやって、しっかり自分のこともし、そういうことも少しやっということうことで、試みている。そうすることによって、横の連携もよく取れるようになり、生徒同士がそれを超えようと、ものすごく自分の表現がうまくなってきている気がする。いろんなことを体験させようと、いまがんばって取り組んでいる。

世代間交流について。私たちの専門学校では今年は地区の草刈りに一度参加した。そこで年代を超えて地域の方たちと交流ができるし、お互いに地域でとも育てても顔見知りではなく、あいさつもできないところもあるので、少し顔見知りになって会話ができるような状況。そうすれば年配の方から学ぶこともたくさんあるのではないかと思います、勉強以外のところから少しずつ自分に自信のもてる子どもにしたいということで、何かをもっとしようと考えているところで、少し実行している。皆さんの意見から、いろんなことを考えて、実行したい。

土井会長

専門学校は特殊なところではなくて、大学を卒業してから職業能力がないと気づいて専門学校へ行くという学生も出ている時代。地域でがんばって、地域の企業等に勤める人を育てる尊い機関だ。

小島委員

子どもたちに読み聞かせをしている関係から、子どもたちとかかわることが多い。文化とていうのは庶民のもの。そういう感覚がない人たちが大勢いる。私はシニア大学に行って、おじいちゃんやおばあちゃんが昔歌った歌、手遊び、そんなものを子どもたち伝えてくださいね、それが日本の文化ですから、と話をする。たいそうに構えて日本の文化を伝えるということではなくて、そういうところが地域の中でもうまく伝達できていたら、子どもたちにとってもいいことなのかなと感じて、これからもそういう方向が、少しでもできていくように、協力していきたい。

生涯学習について、ここの皆さんはその先端をいっている方だと思う。皆さんのすばらしい意見を参考に、私は地域に帰ったら、どんなふうに見えるかと思うと、このままではできないなと思うことと、そのぐらいならできるかなと思うことがある。すぐに解決する問題ではないが、少しずつでも前に進むようにお手伝いできていたらいい。本当に地域の差はとても大変なことだと思う。大きな市町村は、こういうふうに決まりましたというのが県からくると、それをやりましょうということにはなるが、小さい町村だと、なかなかそこまでできていかない。そういうところがあるので、県としてこんなふうやって

いきたいといっても、なかなかそのへんが難しいと思う。

それから、長野県は日本で一番公民館の数が多い。公民館を使ったらいい。公民館は市町村でも必ずあるところだ。公民館は、これからやらなければならないことがたくさんあるのではないかと。そのことを、みんなで考えていかなければいけないのではないかと。

土井会長

長野県に公民館がこんなに多いということ。公立の公民館だけでなく、地区の人たちが自費を、会費を払い合って何千万円もする公民館をつくっている。地区公民館もある。これだけの教育熱というのが、信州の教育の特色。そこに高齢者だけが集まるというのではなくて、どう学校と連携するか、これが非常に大事な課題となる。

植松委員

私ども図書館だが、世代を超えてということで、イベントを考えている。一つ例を言うと、戦争を知っているお年寄りの戦争体験談を語ることをやっている。それが7年間続いていて、小学生、中学生が興味をもって聞きに来る。いま、我々が苦労しているのは、その体験者が急になくなったという。これが、何に起因するのかと私どもみんなわからないわけだが、やはり子どもたちにしてみれば、実体験したことのないことを生身で知っていく、知りたいというような、興味が非常にあるのかなと分析をしている。

そのほかに、子どもに図書館祭りで、親御さんに読み聞かせ等々やるが、いま引っ張りだしているのは、やはりおじいさん、おばあさんの読み方。そこをキーワードに図書館祭りで、ちょっと上の年層の人たちに読み聞かせをしたらどうかという取り組みも実施している。私どもも、公民館と図書館の複合施設なので、図書館も公民館活動とタイアップして、いろいろ事業をやりたいと考えている。世代を超えての交流について、何か参考になれば、取り組んでいきたい。

土井会長

図書館で、小中学生が参加して、戦争体験を聞くと、こういう世代間の交流もやっていただいている。それでは、今日の審議の大事な点、これから地域で学んだことを、どう地域に還元していくか。そのための具体策はどうするか。学びの場は、いまそれぞれにある。そこで学んだことを、どう関連させて地域に還元していくか。そのことについて、意見をいただきたい。

白戸委員は、いろんな実践をされているので、これ以上アイデアがないかもしれませんが、ほかの皆様の声を関連付けて、長野県としての将来の生涯学習の振興って、こういう立場から具体的に、あと一歩、何か出ませんか。

白戸委員

先日県の公民館大会で、私はコーディネーターをやり、阿智村の岡庭村長をパネリストに入れて話をしていたが、まさに公民館を含めた地域の拠点というのが、単に人がそこで学んで教養が豊かになるだけではなくて、そこを拠点にしながら人のつながりをつくっていく、それを還元するという、その重要性をずっとおっしゃった。

そういう意味では、先ほどの図書館の話もあったが、本当に必要な学びというものを、公民館も含めて地域の中でやってきたのかという、反省をしなければいけない。公民館だとか、あるいは社会教育、生涯学習というキーワードは、これから必要という話にここではなるが、もうちょっと広く国のレベルや、いろんな政策を見ていくと、むしろ逆風。どちらかというところ切られる方向にあるという気がしてならない。必要だと言われているのと、実際に予算がどうなるかを見ていくと、すごくギャップがある気がしている。その差が、学びということ、学びの中身が現代のニーズときっちり合っていないのではないかということを考えていかなければいけない。それがないと、せっかく学んでも、それを還元できないということになっていくのだろう。

話が飛ぶが、僕は過去2年ぐらい、松本市の都市内分権の審議委員をやっていて、23万都市の松本をどういうふうにしていくのかという話をしてきた。たとえば、長野市みたいな形で、地域自治協議会をつくるか、あるいは飯田もそんな形だと思うが、そういうところを視察した中で、結局、我々が選択したのは、公民館を中核とした緩やかな自治組織づくりというような結論を出した。要は、地域づくりということと、社会教育・生涯学習がつながっていなかったのをもう一回つなげましょう。つながってなかったという評価をされたので、たとえば公民館はなし、自治センターになりなさいという、そういう評価をされてきているところがある。それが、正当かどうかは別にして、そういう流れがある。

まずひとつは、生涯学習と社会教育を含めて、何に向かって学ぶのかということ、これは原則論だと思うが、それをもう一回考えるということが大事だ。

もうひとつは、より具体的に、先ほど言ったように、僕なんか公民館とおつき合いさせていただいている、いい公民館、いい主事というのはどういうのかというと、「こういうことをやりたいんだけど、どうか」と言うと、2、3日以内に、こういう人がいるよって具体的に返ってくる。地域の中を知っている。ところが、皆さんのように忙しい。たとえば公民館の主事や館長とお茶を飲んで話ができるなんて、とてもじゃないがそんな時間がないというのが現状。やることがたくさんありすぎる。地域のそういう情報収集とか、人材のネットワークづくりというような、そういう機能をもつような所が、それは公民館でもなんでもいいのだが、ひとつきっちりないといけない。それは、仕組みではなくて人。そういうのをうかがえるようなセンスをもった人がいてやらないと、絶対機能しない。要するに、ここで議論するとどうしてもこういう仕組みをつくらうという話になるが、僕はもう極端な話、同じ主事でも、あの人だったらいいが、あの人だめという、そういう世界ではないかと思う。だから、行政によっては、公民館の主事になる人が、島流しみたいな部分がないにしてもあらず。そのことから考えていかないと、うまくつながらない。絵に描い

た餅になってしまう。でも、それさえできれば、先ほど意見があったように、ないものからやるというのはたいへんだ。あるものを活用するというのは、すごく現実的であって、そこをどうもう一回やっていくか、本腰入れてやる必要がある。

土井会長

今後の方向に大きな示唆をいただいた。生涯学習の拠点になるのは長野県においても公民館であることはまちがいのないことで、新たにつくる必要のない、伝統ある施設を活用して、住民からの信頼感も長年培われてきている。今後の発想の転換。従来、教育イコール学校教育、その上にちょっと社会教育がつながっている、生涯学習の考え方が出る前の段階のもの。かつては、公民館は学校の延長で、そこで様々な教室が開かれる存在だった。今は、公民館は小中学生をよんできてイベントを行う、公民館が地域へ出て行く、生涯学習の場として展開してきている。図書館もイベントをするようになってきている。

こういう社会教育施設をフルに活用しながら、長野県らしい、ひとつの方向として、私実践してきていること。今、農地が遊んでいる。毎年 100 万人の団塊世代が定年を迎えていく。子どもたちが 13 万人も学校へ行くのを嫌だと言っている。50 何万人もの働かない青年がいる。この問題を誰がどう解決していくか。

それには、地域にある公民館に地域の人たちが集まって、地域の遊休農地を地域の人たちがみんなで耕しあって、ジャガイモやサツマイモを取り、お米を育てて、それを公民館の秋の行事のエネルギー源にしていく。学校の延長として、机の上の勉強だけでなく、公民館主事が自ら地域と連携して、荒廃地を耕す。そこに、土、日曜日に子どもたちを入れる。「信大茂菅ふるさと農場」を耕してきて、来年 10 年目から新たな発想でつくる。親子で 40 組参加して、プラス定年退職者を募集する。不登校生、ニートを募集する。そして学生がそれを世話する。「信大茂菅農業塾」という塾を開いて、青少年を、定年退職者のキャリアを生かして運営していく。こういう展開を考えている。

地域へ出れば、草ぼうぼうの荒れたところが山ほどある。これを放って、土作りをせずして、人間だけよくなってもらいたい、こんなことがありうる訳がない。だから、まず地主さんから土地を借りて、みんなで耕す。これが地域の人たちとの輪をつくることであろうと考えている。

この続きは、次回、大いに語っていただく。